

勉強天国の日本

イーリヤ・ムスリン

私はすでに6年間、東京大学の宗教学研究室に所属しており、大学院生として勉強している。ここ数年の私と私の研究活動をご存じの先生方や大学院生が多いと思われるので、ここでは今まであまり語ってこなかった、自分の初来日をめぐる事情や学部生時代の日本留学の様子について書くことにした。慣習的には、このコーナーでうちの日本人大学院生が自分の海外での留学経験について書くことが多いため、日本とは異なる世界への窓が提供できるよう、当時の自国の様子を絡めて記述する。

私のこのストーリーは、90年代のバルカン半島で始まる。私が高校生のあるころ母国ユーゴスラビアで内戦が勃発し、戦火はスロベニアからクロアチアを經由して、最も多くの犠牲者が出るボスニアへと波及した。当時のユーゴスラビアは6つの共和国から成る連邦だった。連邦、そしてセルビア共和国の首都でもあるベオグラードで生まれ育った私は自然科学の高校に入ったが、医者あるいは化学者になるだろうという、それまでの漠然とした将来のキャリアに関する考え方が大きく変わり、哲学や比較宗教学に熱い興味を持つようになった。この変化のきっかけとなったのはベオグラードの剣道家を短く映したテレビ報道を見たことだった。当時セルビアで剣道をやっている人は20人にも満たなかった。私はこれこそ格好いいと思い、練習に通い始めた。そこで剣道熱心なセルビア人大学生に『五

輪書』、『葉隠』、『武士道』などを勧められるままに読み始め、ある日買物に出かけた時に、これから東洋思想や哲学に専念したいと、突然研究の情熱に包まれた。それで日本の禅、中国の道教などについて読み始め、そこから東洋文化や宗教全般に興味が広まった。それと同時に、もっと宇宙と人間を知りたいという知識欲も湧いたため、粒子や天文学、分子生物学や進化論などに関する書物を精読する一方、様々な神話や西洋の哲学も熱心に読むようになった。

当時も私の世界観の基盤には自然科学の研究成果があり、無神論者であったが、様々な宗教思想において尊い理想があって、価値や生き方に関して見習うべき部分があるのみならず、宗教を研究することで人間というものについて多くのことが学べると考えていた。数学的な計算や化学や物理学研究室での実習が自分の目には退屈に映っていたので、医者あるいは自然化学者になるよりも宗教を中心に人文科学の勉強をしようと思ったのである。しかし残念なことに、セルビアでは宗教学、あるいは比較宗教学というような学科がなかった。そのため、特に敬愛する日本の思想や文化について勉強しようと思い、ベオグラード大学の日本語・日本文学科に入った。

しかし入学した直後、授業に出る前に、徴兵制による兵役義務のために18歳で軍へ入隊することになった。一年後に復学したら、熱望していた日本についての勉学が失望の連

続になってしまった。当時セルビアは国立大学しかなく、そこでは選択科目という制度がなかったために、その学科の学生全員が個人的な関心とは関係なく、同じ内容を勉強しなければならなかった。そのため言葉と文学が中心だといってももっと広く、日本の歴史や文化、思想などについても教えてくれるだろうという私の期待は、完全にといいほど外れてしまった。

しかし、これは実は自分が国の大学在学中に直面した問題の中で最小のものであった。内戦やアメリカが率いる国際社会による制裁によってセルビアでハイパー・インフレが起こり、国家は急激に疲弊し、国民が貧困に陥ってしまった。両親の当時の月給は、二人合わせて750円だった。タバコ6パック相当の金額だった。ただし、それもあくまでも給料をもらった瞬間に通貨の闇市で交換した場合のみの価値であり、すぐ安定した外貨に換えないと、二、三時間後実際の給料の価値が半分に急落してしまうという状況である。私は軍隊にいる間、気温がマイナス20度まで下がる地域で服役し、資金不足で食糧が十分ではなく、頻繁に停電が起こる中で空腹や寒気によって体が弱っていた。国全体で密輸入など犯罪が盛んになり、軍隊でも盗難が多発し、ストレスやアルコール中毒で暴力に走る軍人が急増したために、私は精神的にも限界に追い込まれていた。だが、復学すると、さらなるショックが待ち受けていた。私が軍から帰った年、人材が足りないという理由で、日本語科は新入生を募集しなかった。したがって一年生のための授業がなく、私に教える先生もいないと言われたのである。そこで学長に別の言語を勉強するように勧められたが、私は結局、一年間日本語科に籍を置きながら、家で日本語を独学して一学期で二学期分の教材を覚えるという形で、教官のついている二

年生の授業に出られるよう、学年が一つ上の学生たちに追いついてみることにした。そして何とか追いつくことができ、2年後には自分も加わった、独裁主義政権に対する抗議運動によって授業が数か月間中断にもなったが、最終的にはクラスのトップとして日本留学の費用を完全に賄う日本の文部省の奨学金を獲得することができた。

メディアの報道をみると、こういう文脈では、成功を信じてやりたい仕事あるいは勉強に情熱を注いで混乱を克服したというストーリーのパターンが極めて多いが、私のケースではそんな格好いいことはいっさいなかった。教職員不足や暴動などで授業数が極めて限られている中で日本語の勉強をやめようと毎日思っていたし、犯罪や腐敗によってしか安定した生活や社会的な地位が得られないという社会的条件の中、勉強の一般的な意味もとても深く疑っていた。そして軍隊での経験によって自分のあらゆる理想が崩れ、それまで崇高で意味や価値の源泉として生きる上で欠かせないと思っていた思想や知識が、実際の生活の中では空しくて役に立たないもののように見えるようになってしまったため、哲学や科学に関する広い知識よりもやはり、食糧や身の安全の確保といった具体的な生存上の問題を解決するのに必要な世渡りのスキルを身につけるべきだったと自分を責めながら考えていた。結局、日本語の勉強をやめず、ある程度混乱を乗り越え、留学生として来日することができた要因は、高い理想でも揺るぎない信念や勉強に対する情熱でもなく、羞恥心だった。私は人生に失敗するのが恥ずかしかつた。

そして運もあった。というのは、日本へ出発する2週間前に私に動員命令が下され、当時始まったばかりのもう一つの戦争、コソボ紛争へ送られる予定だったが、幸いにも病氣

だったので軍事当局に診断書を提示し、一時免除になった。そしてその間に日本へ（完全に回復していないまま）旅立ったのである。診断書が認められるかどうか、つまり出国ができるかどうかを出発のぎりぎりのところまで憂慮しつつも、もし日本を訪れるという夢も、留学がもたらすだろう日本語能力の上達や極端な貧困の脱出のチャンスも消され、しかもわずか 23 歳で他人の意思によって人を殺し、さらに自分も殺されるか身体障害者になるかもしれない危険性にさらされた場合、すなわち自分の人生が取り返しの付かないほど台無しにされた場合、このことを一体どう受け入れられるのだろうか、などと出発寸前まで悩んでいたせいで、成田には心が取り乱した状態で到着したのだった。

そこで私の日本での留学経験が始まった。当然来日する前は日本について色々読んでいたし、自国で何人かの日本人に会っていたので、どういう国でどういう生活が待っているのかはだいたいにおいて出発の前からも把握していた。人口が多くて大都市ではその密度が高いことも、科学技術が大変発達していることも知っていたが、住むことになった渋谷近くの留学生会館で車から下され、荷物を部屋に入れてからすぐに知り合ったばかりのチェコ人とイギリス人の留学生とともに町を見に出たら、渋谷駅前で複数の大きな画面やそれまで聞いたことのなかった路上という公共空間での宣伝の大きな音、そして何よりも人、人、人の多さに驚いた。まるで SF 映画の舞台に立っているかのように、不思議な興奮と刺激を感じた。しかし、外国人三人で渋谷の交差点を渡ろうとしたら、驚いたことに前と後ろからだけではなく、文字通り四方八方から一斉に学生や退職中のサラリーマンの波が凄まじいスピードで押し寄せてきた。自分たちがそれに飲み込まれ、人とぶつかりっぱな

しになってしまったので、青信号のうちに渡れないことに気づき、途中で引き返すことにした。大人であるにもかかわらず、日本で最初に外に出かけた時に通りをうまく渡れなかったというこの珍しくて恥ずかしい失敗談は、自分にとって貴重な日本に関する初の逸話であり、（東京では人波と歩調を合わせて歩かなければならないということを経験したから）初の実践勉強でもある（笑）。

また、私は日本で治安がよく、公共機関が非常にうまく組織されていて、経済が効率的に回っていることも当然事前に知っていた。とはいえ、交通機関の円滑な運営、大学と区役所での授業や手続きの順調で素早い対応、寮での日本人ボランティアによる合気道、空手、茶道などの日本文化のレッスンの実施、これらのすべての機関の日本人従業員の客に対する思いやりと敬意などにおいて見た日本での生活の正常さと平和に繰り返しばっくりしていた。

そして日本が勉強の天国だとわかった。当時通っていた慶応義塾大学は外国人向けの日本語コースに多くの物的・人的資源を注ぎ、留学生に最新の教育用具を用いながら、日本語の語彙、文法、発音などを詳細に教えていた。私はそこで大量の経済や法律に関する文章、一般新聞の記事、小説などを日本語で読まされ、急速な上達を果たした。日本人がいかに教育を重視し、それに真剣にかつ体系的にアプローチしているかがわかり、感動した。また、来日して最初のころ特に楽しんでいたのは六階建ての本屋さんだった。それまで自国の小さな一階だけの本屋さんしか見たことのなかった、そして一冊の小さな日本語の辞書しか持たなかった私には、まるで大きな知識の海に入っているかのように思えた。日本語の辞書や教材を並べた階だけで、一日を過ごせた。行くたびに客が大勢集まっていた。

なんとこの国では読書をし、教科書などの教材を求める人が多いのだ、勉強や研究がなんと重視されているのだ、と飛びたくなるほど嬉しく思った。さらに、言葉を勉強する学生としてテレビのバイリンガル機能の存在と便利さに驚いた。一本の2時間のテープに日本語も英語も2時間ずつ収められるということで、寮の先輩からテレビ・ビデオをもらった後に言葉の勉強のために様々な分野のテレビ番組を何十時間も録画した。

こうして留学生の私は自分が勉強をするのに最高の環境にいて、勉強や仕事における努力が尊重され、様々な形で報われる、社会的

な正義のある国にいるのだと分かった。国、会社・機関、個人というすべてのレベルで教育、知識、能力育成に多大な資源や労力が注入され、向上心や努力の精神が養われる日本の健全な雰囲気の意味を感じ、インスピレーションを受けた。そして、私はその数年後、研究生として東大に入り、高校生のころの宗教学を勉強したいという夢が叶った。日本人にこれからも勉強の尊重、努力の重視、向上心の養成などといった素晴らしい価値観や理想を大切にし、維持してほしい。その点において我々の東大も、大きな社会的役割を担っている。